



墮ちる

A と V

あんぷらぐど
荒縄工房

1

水絵を
どこまでも
墮としてください

墮ちる A と V 1

あんぷらぐど著

荒縄工房



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的S M、伝奇S M小説、S M純愛小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

AV疑惑	6
惨めな誓い	43
生体検査	85
お尻の秘密	123
強制汚姦	162
奴隸管理	210
どん底堕ち	242
夜の淫楽	287
美肉便器	326
磔(たつ)刑(けい)遊戯	365

火炎地獄 403

恥辱の示談 443

奥付 454

AV 疑惑

疑惑というものは、本人の知らないところでいつの間にか大きくなるようだ。

すっかり広がり、根を深くおろしてしまったあとに、ようやく本人の知るところとなる。そして慌てる。この慌てぶりが、疑惑を持った人たちからは、より悪く解釈される。

アイスティーに砂糖を入れている水絵みずえの、のんびりした手つきにじれたように、ブラツクのままのアイスコーヒーを一口すすった萌子もえこが「疑惑について知

「つてる？」と言ったとき、水絵はまったくわからず、ただ戸惑っていた。

「なんの疑惑？」

水絵は九月に入社してまだ日が浅かった。F社のサイト運営に関連して広告の掲載などを取り仕切る部門で採用され、仕事は忙しかった。通販サイトを盛り上げるために生活情報サイトをつくり、そこに提携会社の広告などを入れていたが、さらに業種を拡大して広告収益の拡大を狙うことになったのだ。

「水絵。訊きたいことがあるんだけど」

同期で入った萌子からドリンクコーナーに誘ってき

た。

萌子はショートカット、スリムな体つき、テキパキとした動き、そして時に鋭すぎる口調……。性格も見た目も水絵とは正反対だったが、仲はよかった。わからないことをお互いに相談し合っていた。どちらも結婚願望がありながら、付き合う相手もない点で共通していた。

「いいよ」と水絵はパソコンの前を離れ、窓際のドリンクコーナーへついてきた。狭いが社員の憩いの場になっていた。

両国。窓の外には大相撲で知られる国技館、江戸東

京博物館が見える。

この街は東京の東側、隅田川に面している。JR総武線で秋葉原から二つ目。オフィスビルが建ち並ぶ。

ちゃんこ鍋の店も多いが、会社もたくさんある地域だった。国技館と博物館の特徴ある建物ばかり目立つのだが、鼠小僧の墓で知られる回向院、忠臣蔵で有名な吉良邸の跡など江戸時代の史跡が点在していた。

「疑惑はね、あんたのこと」

「なんのことだろう……」

微笑む水絵に萌子はいら立つ。

「私には正直に教えてほしいんだけど」

「うん」

「あなたAVに出てたの？」

「え？ なに、それ？」

驚いたとき大きな瞳がさらに大きくなる。ぷっくりとした涙袋。長いまつ毛。意識するわけではない。幼い頃からそうした表情が身についている。

入社時から水絵はかなり目立つ存在だった。萌子のところには、水絵がどういう人かを聞きに来る先輩たちは何人もいた。男も女も、かわいい女は気になるのだろう。

合コンの誘いも多い。萌子は「必ず水絵も出ること」

と念を押されて頼まれた。萌子は水絵を連れ出す道具というわけだ。

しかし水絵はこの誘いにはまったく応じなかった。結婚願望があって付き合っている男もいないのなら、合コンに出るべきだと説得しても「苦手だから」と断ってしまう。

なぜ水絵は合コンを断るのか。その理由はわからない。「苦手」というだけ。萌子には想像もつかない。そのうちに、「水絵がAVに出ていた」という話が伝わり、あつという間に広がった。

「AVよ。アダルトビデオ。エッチなやつ」

そこまで説明しても水絵はピンとこないようだった。

「ビデオって……。DVDとかブルーレイとかじゃないよって？」

「もちろん、それも入ってるけど、伝統的にそう呼ぶのよ」

「そういうの、出るわけない」と水絵は笑っている。

「どうして、そんなこと訊くの？」

その目で見られるところが悪いことをしたかのような気になる。清純なのか。無知なのか。無関心なのか。その愛らしさでいままで生きてきたのだろう。

「今夜、付き合っつて」

「合コンは行かない」

「女だけよ。逃げたら大変なことになるわよ。AV疑惑をはつきりさせないと」

「仮に出ていたとしても、それがなにかいまの仕事に
関係ある？」

「そうだけど、みんな納得しないから」

水絵はため息をつき、「めんどろだな」とつぶやいた。さすがに笑みも消えていた。

「だめだよ、そんなこと言ってたら。上の人に知れたら大問題になるかもしれないんだから、いまのうちに

ちゃんとしておこうよ」

萌子の強い言葉に、水絵は渋々うなずいた。

疑惑の当事者は疑惑を持たれていたことを、ずっとあとになって知る。

そのとき、疑惑そのものを知らなかったのだから狼狽しても不思議ではないのに、その対応しだいではむしろ疑惑は深まり、どれだけ否定しても「あれは、やっている」と解釈される。さらに「もし根も葉もない話だったとしても、あの態度はない」と、性格批判へと飛び火してしまう。疑われるような人、という烙印を押される。

打ち消しても、釈明しても、媚びても、へつらつても、怒っても、泣いても、なにをしても元には戻らない。疑惑はやっかいなものだ。

重たい夜がやってきた。

「居なきやだめ？」

JRガード下の居酒屋に連れ込まれ、狭い席に座らされてもなお、水絵は逃げようとしていた。

「だめよ」

ほどなくして、社内の女性たちが四人、なにかおもしろい話でもあるのか、笑いながら入店し席についた。席取りをしていた水絵たちは、ズレて端に移動しよ

うとしたが、「今日はそこ」と奥に押し込められた。テーブルの角。両側を先輩社員がはさんでいる。背後は壁だ。

乾杯のためにサワーなどを注文し、水絵もハイボールを頼んだので、先輩たちはちよつとざわついた。酒が飲めないから合コンを拒否しているという説はここで否定されたわけだ。

「水絵。歓迎会も一次会で帰ったし、ほとんどお酒も飲んでなかったでしょ」

リーダー格の萩原ケイコの声は優しい。三十過ぎた独身女性。スリムすぎる。スポーティーすぎる。それ

でいて帰社時のメイクは濃い。

「合コンも来ないし……」

「すみません」

「それよりも」

ケイコはバッグからカラーコピーを取り出して、水絵に突きつけた。ネットで配信しているAVパッケージのサムネール。

「これ、あなたじゃないの？」

「ええっ！」

居酒屋はそれほど暗くはない。水絵は十二本のAVのパッケージをじっと見ていた。

大きな瞳は視力が弱いのだろうか。焦点が合わないのだろうか。それとも泣き出すのだろうか。

「これ、私に似てますか？」

冷静な水絵の反応に、全員がいら立つ。

「似てるわよ」

「そうかなあ」

否定もせず、肯定もせず。似ている、似ていないという議論は、ケイコたちの気に入らない展開だった。

つまみが並び、飲みながら、カラーコピーがみんなの中を回る。ほかの女子たちとは違い、水絵はそのどぎついタイトルに衝撃を受けて青ざめていた。

変態。調教。M 奴隷。ヤリマン。肉便器。ぶっかけ。
飲精。乱交。輪姦。アナル姦。排泄。公衆便女……。

仕事ではまず出会うことのない言葉ばかり。世の中にはこうしたキーワードにあふれた世界があることを目の当たりにしてショックだったのだ。

水絵は正直なところ、その言葉の意味を深くは知らない。ただ言葉から受ける印象は劣悪で、口に出したり、こうした場で堂々と語るものではないことぐらいはわかる。

みんなの様子を見ていたが、怖がっているのは自分だけらしく、萌子も先輩たちも、平然と酒を飲み、唐

揚げを口にしていた。

「見て見て！」

もつとも太っている久保田りょうこ遼子が、バッグからなにかを少しだけ見せる。

「うわ、マジ！」

「昨日、届いたのよ」

「勇気あるわあ。さすが遼子様」

ケイコが遼子を「いいこいいこ」する。

「ありがとう、ケイコ様。これ、見ません？　そして水絵と比べるの。そうすればはつきりする」

「そうよねえ。写真だけじゃ、他人のそら似かもしれ

ないものね」とケイコ。

「どうなの、水絵。遼子があなたに激似の女優が出ているAVを手に入れたの。これから比較しない？」

水絵は思わず立ち上がった。

「どこへ行くの？ 逃げるの？ ここではつきりさせないと、あんた、完全にAV女優ってことにされるわよ」

言いがかりにすぎない。しかし水絵は実際に逃げだそうとしていた。

萌子が水絵の手をとって座らせる。

「だめよ、逃げたら」

理不尽な飲み会で、水絵はワリカンを強要された。

そして萌子に手をつかまれ、ケイコと遼子に前後をはさまれるようにして、近くにあるカラオケに連れていかれた。

「ここなら安いし、大画面よ」

パーティーが開けそうな部屋が予約されていた。そこには百インチのプロジェクターがある。遼子が慣れているのか、AVをセットして再生している間、水絵は萌子とケイコに腕をつかまれてソファーに座らされていた。

見るに堪えない映像だった。

凌辱。緊縛。浣腸。アナル……。

水絵はほとんど目を背けていたが、声は容赦なく聞こえてくる。

「ぎゃー、だめー」

ぐちゅぐちゅという音。肌を打ち鳴らす音。あえぎ声。悲鳴。絶叫。耳を塞ぎたいのだが、萌子とケイコに腕をつかまれていてそれもできない。

彼女たちも飽きてきたのか、飛ばし飛ばし二本を見終えたが、「そつくり」という声と「そんなに似ていない」という声にわかれた。

「じゃあさ、実際、比べてみようよ」

「顔はヘアスタイルや化粧でごまかせるから、もつとごまかしようのないところで比較したほうがいいわ」
女子たちの目が水絵に注がれる。

「やっぱりオツパイでしょ」

ケイコが言う。

「そうよ、水絵。オツパイで比べるのよ」

遼子はあからさまにバカにしているような態度だ。

「いやです！ そんなこと！」

「いやよいやよも、好きのうちってね」とケイコはオヤジのようなことを言い、水絵のブラウスに手をかけた。

「許してください。ホントに。私、なにもしていませんから……」

「だから、それを証明するのよ。ここには女しかいないんだから、恥ずかしがることないじゃないの」

萌子までも声を荒げる。

同性でも恥ずかしい。それにこの部屋には大きな窓があり、廊下から丸見えだ。そこをたまたに店員や客が通っている。

「ちらつとぐらいじゃわからないのよ」

ケイコと萌子が、水絵の手をつかんで立ち上がらせ、画面の前に立たせた。

「いいところで止めてよ」

ハゲオヤジたちにレイプされている女性の乳房がはつきり映し出されたところで画面が止まる。

「比べるのよ」

「ムリよ！　だめ！」

逃げようとしても、萌子がかっちり腕をひねり上げている。

どうしても合コンに出ない水絵を巡って画策するうちに、萌子はケイコたちと親しくなっていたのだが、水絵はそんなことは知らない。

ケイコがブラウスのボタンを外し、ほかの女子たち

が囲む。白いブラジャー。ケイコはニヤニヤしながら抱きつくようにして、背中のホックを外して緩めた。

「大きいわ、水絵の」

ずれたブラから、乳房がこぼれ落ちた。みんなが想像していた以上に大きかった。

「Dかな。Fまではいかないでしょ」

ケイコや萌子が見とれている。

理想的な形だった。なだらかな斜面の先に、小さなピンクの突起があり、その周辺は薄い色素で囲まれている。そこから下部へと優雅なアールを描いて影に吸い込まれていく。

脇から乳房への、ブラの跡がついた部分でさえ、滑らかで艶と張りがある。

「そつくりだわ！」

誰かが叫んだ。

「似てるわけない！ もうやめてください！」

画面と比べても、大きさは実寸ではないし、角度も違う。

「これと比べてみようよ」

遼子が画像を動かし、床に押し倒されてレイプされているシーンにする。萌子とケイコにむりやり床に引きずり倒された。みんなが手足をつかんで、仰向けに

していく。

「似てるわね」

つつましい乳首は天に向かって突き上げ、その重さに潰れることもなく、紡錘形を保つ乳房は誇らしげでさえあった。

「あり得ない！」

水絵の叫びは無視される。

「このAVでいくらもらったの？」

「出てないです！」

「オツパイ、そっくりなのによく言うわ」

泣きじゃくる水絵を彼女たちは見下して笑う。

「バカね。否定するからこんなことになったんでしょ。AVだって仕事なんだから、それだけで差別したりしないわよ。疑惑がホントだとしても、私たちは水絵の味方だもの」

「だけど、ホントに出てないの」

「まだ言うの！」

鋭い音が響いた。

萌子が水絵の頬を平手で叩いたのだ。

「あ、ごめん」と萌子。

水絵の頬が赤くなっていた。

「そうよ、暴力はダメよ」とケイコ。

おかげでしらけたのか、熱狂は去った。

しかし、この日から水絵の人生は大きく狂っていく。

翌日、遼子が水絵のところへやってきて、こう囁ささやいた。

「水絵。無修正の画像を手に入れたの。今夜、うちで続きをするわよ」

「いきません」

「社内では疑惑だけが一人歩きしてるの。誰かが証拠を握ったら、かえって面倒なことになるでしょ。いまのうちに、私たちを味方につけておいた方がいいと思

うけど」

そして遼子が水絵のパソコンに少し触れると、水絵とAV女優のバストを並べた写真が画面いっぱいに表示された。

「あっ」

「うちのパソコンはセキュリティがうるさいけど、抜け道ってのはどこにでもあるのよ」

すぐに元の表計算の画面に変わる。

「こういうところであれが流れたら、大変なことになると思わない？」

なにがなんでもAVに出演した経験があることにし

たいのだろうか。それにどんな意味があるというのか。臆病すぎる水絵がそんな大胆なことができるわけもないのに、なぜかケイコたちも萌子も信じてくれないのだ。

いずれにせよ、決着が求められている。水絵は今夜で終わりにしようと決めた。きっぱりみんなに言うために、行くことにした。

遼子のマンションは会社に近く、バスで五分ほどだった。萌子、ケイコ、遼子だけだった。この人たちだけを説得できればいい、と水絵は思った。

しかしマンションに着いてみると、水絵の想像を超

えた準備がなされていた。ごつい三脚にビデオカメラが取り付けられ、獲物を狙っている。

「さすが、遼子様」とケイコ。

「でしょ？ ケイコ様。同じように画面で比較しないとわからないから」と遼子。

「どういふことですか！」

「まあまあ」と萌子。「昨日はごめんね。叩く気はなかったのよ。きつちりと比較すればわかることだもの。やろうよ」

無修正の動画はネットで見つけたもので、遼子はそれをパソコンで再生する。陰部まではつきり見える。

男が離れると、白い粘液があふれる。グロテスクで水
絵は正視できなかつた。

「つまり、これと同じ角度で撮影してみるわけよ」

「そんな！」

やはり来るべきではなかつた、話の通じる相手では
ないのだと悟り、逃げだそうとした。小走りに玄関ま
でいき靴を履こうとしたが、ケイコに腕をつかまれた。

「帰すわけにはいかないの」

「帰ります」

振り払おうとしたとき、遼子が大きな口を開けて笑
いながら、手首を金属の道具で叩いた。

「あつ」

ガチャリと音がした。痛みは大したことにはなかったが、手錠だとわかると気が遠くなった。なんでそんなことを……。

「わかってないわね」

ぐいっと手首を引っ張られ、背後で左右の手首を交差させられた。抵抗しようとしたが、二人がかりで抑えられ、やがてまたも冷たい金属音がした。背中に腕を回して手錠をかけられてしまった。

「私たち、水絵が好きなのよ」

ケイコは真剣な目で見つめる。

「疑惑なんてどうでもよくて、あなたが欲しくてしよ
うがないの」

遼子も「みんな、夢中なのよ」と手錠ごと手首のぎ
ゆつと握る。

「なんなんですか！」

「萌子」とケイコに呼ばれ、慌ててやってきた萌子は、
手に銀色のガムテープを持っていた。

「ごめんね、水絵」

ビリツと引き伸ばされたガムテープが控え目な口に
あてられる。頭を振って逃れようとしても三人の手が
伸び、頭と顎を押さえつけて、むりやりテープが貼り

つけられた。

臭いテープのニオイにむせながら、水絵は恐怖からパニックになっていた。体はとにかく逃げようと外に向かおうとする。しかし狭い玄関だ。靴が散乱するだけだった。

「せーの」とケイコが声をかけると、三人がかりで水絵の体を抱え上げた。

「……」

恐ろしいことに数枚貼られたガムテープだけで、顎も唇も動かさず、声も漏れない。

「ごめんね」と萌子がまた言った。

抱えるようにして床にうつ伏せにされた。

「とにかく撮るわよ」

彼女たちの狙いは、乳房ではなかった。

「無修正の映像と比べてみたらわかるわ。あそこのカタチは千差万別でしょ。似ているようでも、カタチ、色、大きさは微妙に違うもの」

スカートを外されて、パンストをさげられていく。ときどき、足を蹴り上げようとしても、力づくで押さえつけられる。

「ううう、うううう」と水絵のうなり声。

萌子は右足にのっかって床に押さえつけ、左足はケ

イコと遼子がつかんでいた。

「いい子になってよ、水絵」

パンティをずり下げられる。

「ロープがあるわ」と遼子が手を伸ばし、床に置かれたレジ袋からロープを取り出した。それは工事現場などで使うナイロンのロープだった。

萌子が押さえつけている右足首を、ベッドの脚に縛り付けた。左足からパンティを引き抜き、その足首も縛る。

仰向けにされる。ロープをケイコが手にしている。暴れても、じわじわと足を開かれていく。

「カメラ！」

遼子はビデオをかまえて、水絵の股間を舐めるように撮影する。

しつかりと撮影したが、局部だけにとどまらない。水絵の全身を撮影しはじめる。この犯罪行為の証拠となる映像だ。いったい、どういふつもりなのか。水絵は混乱していた。ケイコたちの本当の狙いがわからなくなっていた。

「いいわ。ステキね」

両足をベッドの脚に縛り付けておいて、ケイコたちは動画をテレビで再生した。缶ビールやチューハイが

開けられ、楽しみながら水絵の下半身を鑑賞する。

「似てるかなあ、似てないわね」

「この女優じゃないけど、ほかの人かもしれないわね」
どうしてもAVに出たことにしたいのか。

「これ、うちの社員に見せたら、喜ばれるかしら？」

「もちろんよ。AV並みよ」

「そうよね。鑑賞会を開こうかしら」

「楽しそう」

ケイコたちの言葉は、水絵には理解できない。ただ
いじめて楽しむつもりなのか。

惨めな誓い

水絵の通う株式会社Fは、国技館の裏手、都営地下鉄の両国駅にほど近いビルの四階から最上階の八階までを占めていた。通信販売用のグッズの企画から製造、卸までをしている会社だが、近年は実店舗を独自に持つての販売や、フランチヤイズ展開、自社サイトでの直販など手を広げていた。

職場は女性が八割で男性社員は少ない。

「水絵さん。ちよつと来て」

ケイコが声をかけてきた。水絵は作業を中断してセ

ーブすると、ケイコの机の前に立った。

「約束は守ってるかしら？」

「は、はい」

「チェックさせてよ」

「いま、ですか！」

ケイコの厳しい目が返事だった。

水絵はもじもじしていたが、やがてスカートの上そをつかむと、引き上げていった。

柔らかで艶やかな黒毛に覆われた部分が露わになった。シヨツキングピンクのオープンフロントの下着。

下着とは名ばかりでVゾーンを細いベルトが囲んで

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一六年二月十日刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。